

エコロジカルな回心

～教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ』の呼びかけ～

カトリック京都司教
パウロ大塚喜直

はじめに

わたしは今年の年頭書簡で、環境問題をテーマとする教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』を取り上げ、この回勅で教皇が提唱される「エコロジカルな回心」を紹介したいと思います。環境問題に取り組むすべての人の守護聖人であるアシジの聖フランシスコは、神と、他者と、自然と、自分自身との見事な調和のうちに生きた神秘家であり、まさに「エコロジカルな回心」のモデルです。回勅のタイトルの『ラウダート・シ』とは、聖フランシスコの「太陽の賛歌」の祈りにある「あなたは称えられますように」という意味の古いイタリア語です。この聖人のところは、創造主への賛美と自然への思いやりに満ち、その清貧の生き方は、貧しい人々のための正義と人間の内的な平和が密接に結びついていることを証しました。人間は神の前で、神や他者とのかかわりだけを問われるのではなく、自然とのかかわりも問われるのです。

「エコロジカルな回心」が必要だと最初に呼びかけたのは、教皇聖ヨハネ・パウロ2世ですが、教皇フランシスコはそれを『ラウダート・シ』の中で、4つの「エコロジカルな回心」として展開しています。それは、①神とのかかわりの回心、②他者とのかかわりの回心、③自然とのかかわりの回心、そして④自己とのかかわりの回心です。聖フランシスコの名前をいただく教皇は、地球環境の深刻な破壊と危機を憂い、この問題を、地球という共通の家に住む人類全体で真剣に受けとめ、その解決のために具体的に行動しようと呼びかけています。

注：（ ）の数字は、『ラウダート・シ』の段落番号です。

1. 『ラウダート・シ』の出発点

本来エコロジー (Ecology) とは「生態学」を意味しますが、略してエコと呼ぶ言い方で、わたしたちにもすっかり馴染みになりました。近年では、エコというだけで、人間生活と自然環境に関する学問や運動として理解され、「環境に優しい」「環境に配慮した」「環境負荷が少ない」、さらに「健康にいい」「自然な」といったところにまで意味が拡大されています。『ラウダート・シ』では、人間を生態系の構成一員としてとらえ、人間と自然環境・物質循環・社会状況などとの相互関係、生態環境、自然環境と幅広い観点で捉えるエコロジーについて語られています。

教皇フランシスコの考えの基本は、「あらゆるものはつながっている」という視点です。そこで、キリスト者にとって、この地上で無関心でいられるものは何一つないので (3～6)、世界中の皆で環境問題を共有し (7～9)、その解決のためにあらゆる分野の人、哲学者や科学者、エコロジー運動を先導している人々、諸宗教の人々と対話を促進しようと訴えます (13～16)。

2. 総合的 (インテグラル) なエコロジー

教皇フランシスコは『ラウダート・シ』において、アシジの聖フランシスコを手本とする『総合的 (インテグラル) なエコロジー』という言い方をされます (10)。このインテグラル (integral) ということばは重要ですので、ぜひ覚えてください。インテグラルとは、元来「まるごと、全く傷のないもの」という意味ですが、近年、「完全なもの」、「全人的」、「統合的」などと多義に訳されます。『ラウダート・シ』の司教団の邦訳では、「総合的」と訳し、原意を残すためルビに「インテグラル」と明記

しました。

カトリック教会がいうエコロジーとは、自然とのかかわりだけでなく、人間の持つあらゆる側面を排除しないという全人的な意味と、人間同士のかかわりも、神とのかかわりも、それら全部を含む「総合的なエコロジー」なのです。これについては、『ラウダート・シ』第四章を読みましょう。では、これから順に4つの「エコロジカルな回心」について見てみましょう。

3. 神とのかかわりの回心

まず、神とのかかわりの回心についてです。これは、わたしたち信仰者の創造主に対する霊的調和の回復を指します。『ラウダート・シ』第二章「創造の福音」を読んでください。人間は、創造主である神と、人類と、全被造物との間にある調和を乱してしまいました。これが、環境に対する人間の罪です(66)。その結果、地を「従わせ」(創世記1・28参照)、「そこを耕し、守る」(創世記2・15)という責任をはきちがえ、調和がとれていた人間と自然との関係を壊してしまいました。「地を従わせよ」という神の意図は、地上の秩序を保つということにあるにもかかわらず、人間は大地の支配権を濫用し、他の被造物への専横かつ抑圧的な支配を正当化する誤った考えに陥ってしまいました(67)。当たり前前のことですが、聖書から見たエコロジーを考えるなら、神が全能であり、創造主であるということを経視、もしくは否定する思想を受け入れることはできません(75)。人間には、神の創造のみわざを踏みにじる無制限の権利はないのです。人間は神が人類に託した自然に対する責任を正しく引き受けなければならず、これに気付くことがエコロジカルな回心の始まりなのです。エコロジーでは、被造物として人間が神に全面的に依存するという原則を逸脱してはならず、神に対して謙虚さをもって自然(被造物)と向き合うという霊性が不可欠なのです。

4. 自然とのかかわりの回心

『ラウダート・シ』は、人間が引き起こした環境問題を取りあつかうのですから、自然とのかかわりの回心は、回勅全体に及びます。環境問題とは、人間が生活するための資源として、自然環境が再生する能力をはるかに超える範囲(速度や量)で自然を採取し、汚染した結果、生じた資源の枯渇や環境破壊の問題です。『ラウダート・シ』第一章「ともに暮らす家に起きていること」(20~61)を読むと、現在、地球上で深刻化している環境破壊の実態が科学的に説明され、それらが人間の利己的・自分勝手な、また自国勝手(ファースト)の経済活動によって、複雑かつ連鎖的に引き起こされていることがよくわかります。気候変動も、水問題も、生物多様性の減少なども、先進国が開発途上国に返済すべき「エコロジカルな負債」と見なさなければならない問題なのです。

『ラウダート・シ』第三章「生態学的危機と人間的根源」では、生態学的な危機をいくら描写し説明しても、その原因に人間の根源的危機を認なければ意味がないと教皇は言われます(101)。この人間の根源的危機は、人間のいのちと活動についてのゆがんだ考え方に表れています。その中核にあるのが「技術至上主義」というものです。つまり、人類が高度に開発した技術を使えば、あらゆる経済活動や生活文化は必ず向上するという考え方です。しかし、現実には、利便性向上という恩恵とは別に、世界各地で人間と社会と自然との調和は崩れ、人々の生活を脅かし、人間を不幸にする事象が起こっているのです。

聖書が教えるように、人間だけではなく、神が造られたあらゆる被造物は、相互に密接に関係しています。したがって、被造物の調和の中で、被造物それぞれが固有の目的を持っている事実を見落としてはならないのです(84)。この点に関して、教皇は日本司教団の「いのちへのまなざし」(2001年度版)を引用されました。「日本司教団は、啓発的な観察眼を披露してくれました。『それぞれの生き物が、それぞれのいのちの歌を歌っているように感じることは、神の愛と希望の中にわたしたちが喜び生きることにつながります』」(85)。

5. 他者とのかかわりの回心

今日、信仰者であろうとなかろうと多くの人は、大地は本質的に共通の相続財産であり、その実りは、あらゆる人の善益のためにあることを認めています(93)。これが、共通善の原理です(156~158)。したがって、総合的(インテグラル)な回心には、貧しい人の基本的な権利を考慮する社会的視点を欠かすことはできません。貧しい人々と地球のよろさはつながっていて、貧困問題と環境問題とは同根なのです。教皇聖ヨハネ・パウロ2世は、「神が大地を全人類に与えたのは、人類のだれ一人として欠けることなく生命を維持するためであり、神は何人をも排除したり、優遇したりしませんでした」とのべましたが、教皇フランシスコはさらに厳しく指摘して、こう言われます。「とりわけ憤慨すべきは、自分は他人よりも価値があると考え人々を大目に見続ける、わたしたちのただ中にある、とんでもない不平等です。一方で、絶望的で屈辱的な貧しさに陥って出口のない状況に置かれている人がいるのに、他方では、自分の所有物の扱い方を省みることなく、むなしくも見かけの優越性を見せびらかし、皆が同じようにすればこの星が壊れるほどの廃棄物を後に残す人がいることを、わたしたちは気づかずにいます」(90)。

この教皇の指摘を受けて、わたしたちキリスト者が環境問題に向き合うときは、必然的に隣人への真摯な愛を持ち、貧困や格差の社会問題に取り組む責任を認めなければなりません(91)。だからこそ、総合的(インテグラル)なエコロジーをめざすために、人類が連帯する必要があるのです。この連帯には、将来世代も含む世代間正義を視野に入れなければなりません(159~162)。こうして、「エコロジカルな回心」では、個人の回心だけでなく、共同体の回心も求められます(219)。第五章「方向転換の指針と行動の概要」で、様々なレベルの連帯が提案されていますが、そこで強調されていることは、真摯な対話の必要性です。社会、経済、政治のあらゆるレベルで、誠実で透明性のある対話によって、責任ある良心に基づく行動計画が有効となるからです。

6. 自己とのかかわりの回心

このように、すべてのものがつながっているという視点で環境問題と向き合えば、人間性の刷新なしに、自然とのかかわりを刷新することは不可能となり、適切な人間論なしのエコロジーなどあり得ないことが解ります(118)。現在の生態学的危機は人間の倫理的、文化的、霊的危機の兆候であり、人間のもつ根本的なすべてのかかわりをいやすことなく、自然や環境とのかかわりをいやすふりはできないのです(119)。

これに関連して、教皇ベネディクト16世は「人間エコロジー」について語りました(155)。人間は自分の身体そのものによって、環境と他の生き物たちとの、直接のかかわりの中に置かれています。したがって、身体を神からの贈り物として受け入れることは、全世界を御父からの贈り物として受け取ることなのです。人間は、けっして自分自身の体に対して絶対的権力をもっていると考えるはず、自分の身体を正しく受け入れ、大切にしなければなりません。

このように、環境問題に取り組むためには、人間自身の内的調和を回復する回心が求められているのです。これが、聖フランシスコが唱えた、今日でいうエコロジカルな内的回心なのです。わたしたちは、熱心でよく祈ってはいても、現実主義や実用主義にかこつけて、環境への関心を嘲笑するようなキリスト者であってはなりませんし、自分の習慣を変えようとしないう消極的なキリスト者であつてもなりません。信仰者は「エコロジカルな回心」の必要を謙虚に認め、「エコロジカルな教育」(213)を推進し、「エコロジカルな霊性」を深めていく務めがあるのです(216)。

7. 新しいライフスタイルを目指して

キリスト者は何事にも、「神の国が近づいた。回心して、福音を信じなさい」というイエスの宣言に戻らなければなりません。回心とは、これまでの誤った生き方をただ後悔するだけではありません。神からの呼びかけに応えるため、その呼びかけの方向に向きを変えるという方向転換を命じるものです。「エコロジカルな回心」も同じことです。キリスト者は信仰の次元で環境問題に取り組むために、生活のあらゆる活動を反省し、総合的(インテグラル)なエコロジーに適応した新しいライフスタイル

ルを模索していくのです。特に、消費への執着から解放された自由を味わう観想的なライフスタイルが求められます(222)。「より少ないことは、より豊かなこと」という信念をもって、節度ある成長と、わずかなもので満たされる清貧の生き方です。そのため、被造物との調和を回復するために忍耐づよく時間をかけ、わたしたちの間に住まわれ、わたしたちを包んでくださる創造主を観想するのです(225)。そうすれば、たとえば、食前食後の祈りも自然に実践できるようになります(227)。具体的には、第五章「方向転換の指針と行動の概要」を参考にしましょう。

8. 祈り

回勅『ラウダート・シ』において教皇フランシスコは、環境問題に向き合うよう呼びかけながらも、もっとも根源的な問いを、わたしたちに投げかけておられます。それは、後続する世代の人々に、今成長しつつある子どもたちに、どのような世界を残そうとするのか、という問いかけです(160)。この問いは、ただ環境問題に関してだけではなく、わたしたちがこの世界に存在する理由や生きるための目的、そして人間の働きの意味など、人間の根本的な生き方への問いかけと密接に結ばれています。だからこそ、「エコロジカルな回心」を信仰者として深めるためには、創造主である神にこころを向け、三位の神からの照らしと励ましを祈らなければなりません。教皇は、「わたしたちの地球のための祈り」と「被造物とともにささげるキリスト者の祈り」をもって、この回勅を締めくくられます。これらの祈りには、『ラウダート・シ』に込めた教皇フランシスコの思いが集約されています。

「被造物とともにささげるキリスト者の祈り」

父よ、

あなたが造られたすべてのものとともに、あなたをたたえます。

すべてのものは、全能のみ手から生み出されたもの。

すべてのものはあなたのもの、

あなたの現存と優しい愛に満たされています。

あなたはたたえられますように。

神の子イエスよ、

万物は、あなたによって造られました。

あなたは母マリアの胎内で形づくられ、

この地球の一部となられ、

人間のまなざしで、この世界をご覧になりました。

あなたは復活の栄光をもって、

すべての被造物の中に今日も生きておられます。

あなたはたたえられますように。

聖霊よ、あなたはその光によって、この世界を御父の愛へと導き、

苦しみにうめく被造物に寄り添ってくださいます。

あなたはまた、わたしたちの心に住まい、

善をなすよう、わたしたちを息吹かれます。

あなたはたたえられますように。

三一の主、

無限の愛の驚くべき交わりよ、

わたしたちに教えてください

宇宙の美しさの中で、

すべてのものがあなたについて語る場で、

あなたを観想することを。

あなたがお造りになったすべての存在にふさわしい、
 賛美と感謝を呼び覚ましてください。
 存在するすべてのものと深く結ばれていると感じる恵みをお与えください。

愛の神よ、
 地球上のすべての被造物へのあなたの愛の道具として、
 この世界でのわたしたちの役割をお示してください。
 あなたに忘れ去られるものは何一つないからです。
 無関心の罪に陥らせず、
 共通善を愛し、弱い人々を支え、
 わたしたちの住むこの世界を大切にできるよう、
 権力や財力をもつ人々を照らしてください。
 貧しい人々と地球とが叫んでいます。

おお、主よ、
 すべてのいのちを守るため、
 よりよい未来をひらくため、
 あなたの力と光でわたしたちをとらえてください。
 正義と平和と愛と美が支配する、あなたのみ国の到来のために。
 あなたはたたえられますように。
 アーメン

2018年1月1日
 神の母聖マリア

付録

『ラウダート・シ』で繰り返される10のテーマ 5つの視点

1. 貧しい人々と地球の脆さのつながり	貧困問題と環境問題とは同根
2. あらゆるもののつながり	
3. テクノロジー由来の権力構造（テクノクラシー）	経済を巻き込み政治を左右する
4. 本来の経済？本物の進歩？	
5. それぞれの被造物の固有価値	自然の中の人間の位置とその責任
6. 人間存在にふさわしいエコロジー	
7. 率直で正直な討議	健全な集団的意思決定を支える対話
8. 国際的／地域的政策の責任の重さ	
9. 使い捨て文化	文化を変えうるライフスタイル
10. 新たなライフスタイル	